

## 報 告

## 1971 年における規格委員会の活動

## 規 格 委 員 会

## 1. 概 説

前年の規格委員会活動については、第 12 巻第 12 号 787 ページに報告した。それに引き続いて昭和 46 年 (1971) における経過を、ISO/TC 97 とそれに対応する国内活動および JIS 化への協力についてまとめたもので、“電子計算機と情報処理”についての標準化の動向を継続的に報告することを趣旨としたものである。

## 2. 開設された国際会議

1971年に開催された会議をまとめると、表 1 のようになる。

## 3. TC 79 の活動

本年は Plenary が開催されなかったため、前記の表 1 に示した諸会議を TC 97 の活動とみなしうる。わが国はこれらの会議のなかで、SC 2, SC 4/WG

4 および SC 4/WG 6 について Host Country として協力した。東京会議実行委員会 (安藤馨委員長) の努力と関係者の協力により、わが国の会議運営に対する貢献が高く評価され、SC 2 では異例の感謝決議がなされた。

TC 97 の活動の成果として、前回の報告以後新たに勧告 (Recommendation) および国際規格案 (Draft International Standard) となったものを、それぞれ表 2 と表 3 に示す。

ここに、国際規格案なるものがでてきたわけは、本年 7 月、ISO の規約が改訂され、本年末で ISO 勧告をやめ、1972 年 1 月 1 日より ISO 国際規格 (International Standard) として制定されることになり、DIS はその案ということである。手続きの過程は勧告の場合とほぼ同じであるが、賛成投票率が 60% から 75% に引き上げられた点が異なる。また、どうしても 75% 以上の賛成投票のえられないものや、技術的に公刊

表 1 1971年に開催された会議

委員会	月 日	場 所	日 本 代 表 出 席 者
SC 1	4/19~28	パ リ (仏)	井上 (KDD), 勝沼 (日立)
SC 2	10/4 ~ 7	東 京	元岡 (東大), 瀬野 (富士通), 島谷 (日電), 白浜 (日本 IBM), 都丸 (電電公社), 山本 (日本ユニパック)
SC 2/PG	1/11~13	ジュネーブ (スイス)	瀬野 (富士通)
	3/22~26	ワシントン (米)	島谷 (日電), 白浜 (日本 IBM)
	6/7 ~10	ロンドン (英)	島谷 (日電)
	6/24~25	フローレンス (伊)	山本 (日本ユニパック)
SC 3/WG 1	2/15~18	ジュネーブ (スイス)	欠 席
/WG 1	11/8 ~12	トリノ (伊)	欠 席
/WG 3	11/18~19	トリノ (伊)	欠 席
/WG 4	9/29~10/1	東 京	高橋 (日立), 発田 (日電), 山田 (電電), 森 (日本ユニパック), 吉岡 (富士通), 川合 (電総研), 海宝 (日本 IBM)
/WG 5	11/16~19	トリノ (伊)	欠 席
/WG 6	9/27~29	東 京	西岡 (黒通工), 菊池 (日立), 瀬野 (富士通), 森 (日本ユニパック)
/WG 1 Joint Meeting	11/15	トリノ (伊)	欠 席
SC 5/WG 1	10/18~12	ロンドン (英)	欠 席
SC 6	5/24~28	ハーグ (蘭)	水内 (日電), 林 (日電), 長沢 (日立), 斎藤 (日本 IBM), 横山 (沖電気), 山口 (富士通)
SC 8	10/12~14	チューリッヒ (スイス)	欠 席
WGK	3/1 ~ 5	パ リ (仏)	安藤 (富士通), 海宝 (日本 IBM)

表2 勧告

ISO/R	DR No.	Title
1682	1682	Dimensions and Location of Rectangular Punched Holes in 80 Columns Punched Paper Cards
1729	1729	Properties of Unpunched Paper Tape
1745	1745	Basic Mode Control Procedures For Data Communication Systems
1831	1831	Printing Specifications for Optical Character Recognition
1858	1858	General Purpose Hubs and Reels with 76mm (3 in) Centerhole
1859	1859	Unrecorded Magnetic Tape for Instrumentation Applications
1860	1860	Precision Reels for Magnetic Tape in Interchange
1861	1861	7-track 8 RPmm (200 RPI) Magnetic Tape for Information Interchange
1862	1862	9-track 8 RPmm (200 RPI) Magnetic Tape for Information Interchange
1863	1863	7-track 32 RPmm (800 RPI) Magnetic Tape for Information Interchange
1864	1864	Unrecorded Magnetic Tape for Information Interchange
2021	2021	Representation of ISO 8-bit Coded Character Set on 12 Row Punched Cards

表3 国際規格案

DIS No.	Title
2539	Punched Tape Variable Block Format for Contouring and Contouring Positioning Numerically Controlled Machines
2593	Connector Pin Allocations for Use with High Speed Data Terminal Equipment (CCITT 35)
2628	Complements to the Basic Mode Control Procedures
2629	Conversational Information Message Transfer
2636	Conventions for Incorporating Flowchart Symbols in Information Processing
2690	Unrecorded Magnetic Tape (Physical Properties) for Instrumentation Applications
2711	Representation for Ordinal Date for Information Interchange
2763	Vocabulary of Data Processing—Mathematics and Logic and Arithmetic and Logic Operations
—	Interchangeable Magnetic Six Disk Packs, Physical and Magnetic Characteristics

の価値あるものはISO技術報告書(Technical Report)として発刊されることになる。さらに、すでに発効している勧告は早い機会に国際規格に変更されることになっている。

#### 4. 規格委員会の動き

ISO活動に呼応して、国内での技術的検討を順調に進めるため、規格委員会を5回(46年1月26日, 4月9日, 6月1日, 7月18日, 12月17日)開催した。

同委員会の委員とおもな審議事項は、つぎのとおりである。

委員長 和田弘

幹事 高橋茂, 海宝顕

委員 新井正, 安藤馨, 池田敏男, 石橋秀雄, 猪瀬博, 石井善昭, 魚木五夫, 遠藤力, 河辺陽之輔,

岸上利秋, 喜安善市, 斎藤有, 関山吉彦, 高橋秀俊, 竹下亨, 寺尾満, 研野和人, 中川一郎, 中川隆, 中摩雅年, 西野博二, 野田克彦, 花岡輝雄, 元岡達, 森口繁一, 松山俊介, 横井満, 米沢威行

第26回 各SCの活動報告。SC8の主査が研野委員に交替することの承認。情報処理開発センターから依頼されたJIS化体系調査アンケート資料の検討と各主査による協力の要請。標準化講演会の実施計画の承認。会計報告。

第27回 各SCの活動報告。ISO/TC97の改組に対する態度の審議。COBOL JIS原案作成経過の報告。標準化講演会報告。45年度決算と46年度予算の承認。

第28回 ISO/TC97/SC4/WG6(9月27日~29日), SC4/WG4(9月29日~10月1日), SC2(10月4日~7日)が東京で開催されることに決定した旨の報告と経費の審議。各SCの活動報告。ISO/TC97の改組に対する日本の意見の審議と決定。会計報告。

第29回 経費節減のための予算制実施についての承認。日本電気からの委員が高崎勲氏より石井善昭氏に変更の承認。ISO東京会議実行委員会(安藤馨委員長)の設立決定と予算と設備案の承認。

第30回 ISO東京会議が運営・予算, その他の面で成功であったことの報告。ISO東京会議実行委員会は2回(8月9日, 12月17日)会議を開催し, 東京会議の準備と運営に当たったが, その任務が終了したので解散したことの承認。ISO/TC97の改組に関するPreparatory Working Groupのトリノ会議に対する態度とSecretariatを引き受けることの可否についての審議と決定。主査交替の承認; SC5は高橋秀俊委員より藤中恵氏に, SC4/WG4は野田克彦委員より高橋茂委員に, SC4/WG6は西岡英也氏より川又晃氏にそれぞれ変更。規格委員会規定改正案の承認。

#### 5. 各SC, WGの活動報告

##### 5.1 SC: Vocabulary 主査 西野博二

###### (1) ISO会議

46年4月19日~23日に, パリにおいて第8回のISO/TC97/SC1会議が開催され, わが国からは井上誠一(国際電電), 勝沼進(日立)の両氏が出席した。この会議で審議されたのは, 以下の4つの1st Draft Proposalのコメントの検討と, 3つのWorking Documentの逐語審議である。

###### (a) 1st Draft Proposal

- 02 章 Mathematics and Logic  
 07 章 Arithmetic and Logic Operations  
 10 章 Formalization and Preparation of Programs  
 11 章 Programming Techniques  
 12 章 Instructions  
 (b) Working Document  
 03 章 Engineering Technology  
 13 章 Operating Technique and Facilities  
 17 章 Component Units of Arithmetical Equipment

## (2) 国内委員会

SC 1 委員会 は、46年中に3回開催し(これ以外に書面審議2回)、3件の letter ballot (12章, 16章, 25章に対するもの)の処理と、パリ会議のための準備を行なった。ISOに提出した公式のコメントは6件である。

SC 1/WG 1 (主査別所照彦) は、本期間中に6回開催し、パリ会議で審議された各章の内容の詳細な検討および13章, 16章, 25章の審議を行なった。

SC 1/WGA (主査西野博二) は、本期間中に31回開催し、情報処理用語の英和对訳集(英語 6,000語)の第5版を終え、さらに増補作業を続けている。

## (3) ISO 用語集の現状

ISO で予定している25章の用語集は、現在 DR の投票が終ったものが4章、DR の作成準備中のものが5章、DP の作成準備中のものが6章ある。おおよそ全作業の半ばを終えている状態である。

## 5.2 SC 2: Character Sets and Coding 主査

喜安善市

### (1) 概要

SC 2 第7回会議(1970年10月)における継続検討事項および第8回会議(1971年10月)の議題関連事項を中心に検討し、特に、標準符号の拡張法について積極的な意見を提出した。第8回会議は東京で開かれ、成功裏に終了し、会議の運営に関して、決議文で謝意を表された。

### (2) 国際活動

符号の拡張法を主題とする Preparatory Group (PG) (3月, ワシントン, 出席者: 島谷(日本電気), 白浜(日本 IBM), 6月, ロンドン, 出席者: 島谷), 6・7 単位符号(R 646)の改訂を主題とする PG (6月, フローレンス, 出席者: 山本(日本ユニパック))に続き、10月4日~7日に東京で SC 2 第8回会議が開かれ、元岡(東大), 瀬野(富士通), 島谷, 白浜,

都丸(電電公社)の各氏が出席した。主な議題と結論はつぎのとおりである。

(a) OCR および MICR 用キャラクタのコーディング: 本会議で作成した資料を国際標準案(Draft International Standard)とする。

(b) 制御キャラクタの図形表現: 本会議で作成した資料を国際標準案とする。

(c) R 646 の改訂: 本会議で作成した資料を国際標準案とし、CCITT GM/ALP 会議でも検討してもらう。なお、この資料において、わが国の意見は全面的に採用されている。

(d) 符号の拡張法: 米国から新たに提案された Announcer の概念を導入し、拡張範囲を 2 way に限定した資料を本会議で作成し、これを国際標準案とする。この資料において、わが国の意見は全面的にとり入れられた。4 way の拡張法は、今後 PG を開いて検討する。

(e) Escape Sequences の登録法、磁気テープのラベリングに関する R 1001 の改訂等は継続検討とする。

## (3) 国内活動

SC 2 会議前は、符号の拡張法を中心に検討し、会議後は、1972年2月および3月に開かれる PG の準備として、4 way の符号拡張法、印刷装置やディスプレイ装置の制御キャラクタおよび R 1001 の改訂を中心に検討を行なっている。

Escape Sequences の登録に関する DR 2375 の Letter Ballot には賛成投票をした。

## 5.3 SC 3: Character Recognition 主査 元岡 達

### (1) 概要

ISO としては SC 3/WG-1 を2月にジュネーブで開催したが、わが国からは出席しなかった。印字仕様が最大の問題点となっており、より定量的にすること、勧告数値の根拠を明確にすることが一方で要求され、他方ではこれらの点の検討は将来の課題として早く勧告をまとめたという要求がある。この間の妥協がとれないままに日時が経過している。

OCR-B の字形については米国から WAD 法による評価値が 0 と 0 で小さな値になるなどの指摘があり、ECMA を中心に字形改定の作業が進められていたがようやくまとまった。可成りの変更が大文字アルファベットにあるので今後の取扱いが問題である。わが国は RAD 法を提案し、これによると従来の字形

でも余り問題が起らないこと、JIS が旧字形で制定されていることを理由に安易な変更には反対の立場をとっているが、主張を通す努力が不十分なこともあり、前途は楽観を許さない。

このほか従来の字の大きさのうちタイプⅡが廃止されることともなう呼称問題、Numeric Subset の選定などが問題になっている。

## (2) 国際活動

概要で述べた諸問題につき、わが国のコメントを送付したほか、RAD 法の提案、多数印字データの印字品質評価法の提案などを Working Paper として提出した。

## (3) その他

カナ文字字形や印字品質仕様に関連した実際の作業は JIS 原案委員会（電子協）で行なっているので、その委員会と密接な連絡をとりながら国内委員会は作業を進めている。ECMA 資料を中心に諸外国の活動状況の把握と国内活動の外国への紹介に重点をおいて作業している。

OCR-A の改定についても米国が近く原案をまとめることになっている。

## 5.4 SC 4: Input/Output 主査 野田克彦

SC 4 関係の活動は、各 WG の活動が中心であって、その内容は各 WG の報告にゆずる。SC 4 自身は国際会議も開催されず特に会議をもたなかった。

### 5.4.1 SC 4/WG 1: Magnetic Tape 主査代理 和田弘

(1) 国際会議 11月8～12日にイタリーのトリノで会議が開かれた。主な議決事項は次の通りである。

(a) テープ・カセット (3.81mm) の審議を行ない、まとめた文書 N357 を Draft Standard としての処理に移す。

(b) アメリカの National Bureau of Standards が開発している reference tape cassettes and heads を基準として ISO の Master Standard にしたいので、それに着手する仕事の協同責任を N. B. S. に要請する。また各国がその copy を入手できるように secondary signal amplitude reference tape cassette も依頼する手紙を出す。

(c) 磁気テープについての勧告案である DR1861 1862, 1863, 1864 については、さらに修正を認めた。

(d) トラック、63 RPmm 記録のテープについての文書を審議した。その結果まとめられた文書 N360 を Draft Standard への処理に移す。

(e) 新しい用語 flux transition は将来の文書には使わないことを認めた。

(f) 磁気テープについての vocabulary を WG 5 と共同で審議した。その結果を Technical Report として SC 1 に送る。

## (2) 国内での活動

さきに主査木沢誠氏の辞任以来、活動が見られなかったが、47年からは富士通の岩井麟三氏が主査になって、溜っている懸案の審議が再開される予定である。

### 5.4.2 SC/WG 2: Punched Cards 主査 海宝頭

1971年中に会議を1回開催し、ISO DR 1682「80けたカードの四角孔の寸法と位置」の改訂案を審議した。わが国では、改訂案の最小ブリッジ幅（長手方向の隣接孔間のスペース）が小さすぎて読めない機械もあるので反対投票をした。結果として、この意見は受け入れられ、最小ブリッジ幅は原案にもどされた上、7月に正式に ISO R 1682 となった。

これで、上記の問題に対して将来再検討の必要性もでてくるであろうが、「未せん孔カードの仕様」も ISO R 1681 として1970年12月に制定されたので、パンチカードに関する国際標準化作業も一応終わった。

### 5.4.3 SC 4/WG 3: Punched Tape 主査 林智彦

紙テープに関連する規格として残された問題は、

- (1) 1インチ紙テープのリールとコア、
- (2) 情報交換用エッジパンチカード

の2件が主なものである。(1)についてはすでに2回の会議で検討され、(2)については first draft proposal の準備が進められてきた。

1971年11月18～19日、トリノにおいて第6回の WG 3 会議が開かれ、上記の2項および「テープの光透過率測定法に関するレポート」が審議され、その結果、「リールとコアの規格」については一部修正の上 1972年3月までに賛否の投票を行なうこととなった。

また JIS 規格に関して、JIS C 6246「情報交換用紙テープの孔の位置と寸法」が、1971年3月1日に制定された。

5.4.4 SC 4/WG 4: I/O Interface 主査 高橋茂  
トリノでの第3回会議（1970年9月）の決議のもと

つき、  
(1) 入出力インタフェースに対する“Functional Requirements”についての日本案、

(2) トリノ会議で出された“Functional Requirements”の英国および米国の素案に対するコメントを

送付した。

また1971年9月東京で行なわれた第4回会議に先立ち、

(1) 日本の標準インタフェース案に対して各国から送付されたコメントに対する応答、

(2) 各国から出された“Functional Requirements”の比較

という二つの文書を作成送付した。

東京での会議は9月29、30日および10月1日の3日間にわたり、機振協ビルで行なわれ、日本から高橋茂(日立)、川合英俊(電線研)、山田正計(通研)、発田弘(日電)、吉岡義明(富士通)、海宝顕(日本IBM)、森宗正(日本ユニパック)の7名が出席した。会議はほとんど日、英、米3カ国間で行なわれたとあってよく、日本の寄与は大きかった。会期中に採り上げられた“Functional Requirements”のうち、30項目は満場一致で採用され、2項目は審議未了となった。

東京会議での決議にもつぎ、当委員会では次の二つの文書を作成して年末に送付した。

(1) 審議未了の2項目についてのコメント、

(2) “Functional Requirements”に用いられる用語について。

1972年上半、上記に関連してロンドンで第5回会議が開かれる予定である。

なお1972年秋“Functional Requirements”にもとづいて標準案の審議が行なわれることになっており、そのプロポーザルを求められているので、1970年に提出した日本案を、“Functional Requirements”に照らして、また各国からのコメントを参考にして改訂中である。

#### 5.4.5 SC 4/WG 5: Instrumentation Magnetic Tape 主査代理 和田弘

(1) 国際会議

11月16～17日にイタリアのトリノで会議があった。主な議決事項は次の通りであった。

(a) 精密リール(R-1860)を文書N116のように修正して、DSへの処理を進める。

(b) 記録モードの案(N89)をN116にあるように修正し、コメントを審議した上、DSへの処理を進める。

(c) テープの速さとトラックの形状の案(N87)をN118のように修正して、DSへの処理を進める。

(d) 8mm孔のリールの案(N86)についてはIEC/TC 60の意見を聞いた上、要すれば修正して、

DSへの処理を進める。

(e) 用語についてはWG 4/1と共同作業の成果について意見を聞いた上、Technical Reportとして処理されることを条件にSC 1に渡す。

#### 5.4.6 SC 4/WG 6: Magnetic Disk Packs 主査 西岡英也

(1) 6枚形ディスク

第2回WGトリノ会議で作成されたDraft Proposal、機械的特性(SC 4/N 144)磁気的特性(SC 4/N 145)に対するSC 4内の投票が行なわれた。日本はapprove with commentsの投票を行なった。

投票結果にもつぎ第3回WG東京会議(1972年、9月27日～29日)で本件を審議し投票における各国の意見を検討し、原案に必要な修正を加え機械的特性と磁気的特性を一つの規格にまとめたものを、ISO勧告案としてTC 97に提出することとなった。

(2) 11枚形ディスク

第3回WG東京会議で、英国より機械的特性、磁気的特性の規格案、米国より機械的特性の規格案、日本より規格化に対するComments(WG 6/N 67)が提出され、機械的特性について米国案を原案として審議し必要な修正を加え、これをISO勧告案としてTC 97/SC 4に提出することとした。

(3) 1枚形ディスク

第3回WG東京会議で、ECMAよりIBM 5440コンパティブルの規格案が提出され、機械的特性について審議しこれに若干の修正を加えてISO勧告案としてTC 97/SC 4に提出することとした。日本は本会議にcomments(WG 6/N 68)を提出しIBM 2315コンパティブルのディスクの標準化に対する討議を要請した。

(4) トラックフォーマット

6枚形ディスクのトラックフォーマットの1st Draft Proposal(WG 6/N 50)に対するcommentsを求められ、日本はcomments(WG 6/N 66)を提出した。

第3回東京会議では審議せずPreparatory Groupの会議(1972年2月14日～16日ジュネーブ)を開き6枚形の規格草案の修正および11枚形、1枚形の規格草案の作成を行なうこととなった。

#### 5.5 SC 5: Programming Languages 主査 藤中恵

(1) 概要

ISOの活動は不活発であったが、最近ANSI/X3J1とECMA/TC 10が共同でPL/Iの標準化を進めて

いるため、ISO もしだいに活発化しようとしている。この共同作業が、PL/I BASIS/1 なるドキュメントをまとめることになり、この第4版が ISO/TC 97/SC 5 (ECMA-16) 246 として送られて来た。これを機会に、国内 SC 5 も高橋氏より藤中氏に主査を交替して、昭和46年9月より会合を再開した。上記 PL/I BASIS/1 は、将来 PL/I の ISO Draft Proposal に発展するワーキングドキュメントと見られるので、この検討を当委員会の活動の中心としている。

## (2) 国際活動

### (a) ALGOL の Hardware Representation (DR 1672)

この件に関し、1972年1月27～28日ベルリンで ISO/TC 97/SC 5 の Preparatory Group Meeting が開催されることになり、DR 1672 と各国のコメントが送付されて来たので、情報処理学会の AWG/LDG 研究委員会に検討を依頼した。その結果、すでに日本から提出した意見 (ISO/97/5 N 208) を再度日本の意見とし、特に代表を送らないこととした。

### (b) COBOL の ISO 推薦規格案 (DR 1989)

ISO DR 1989 の投票結果は、日本を含め21カ国が賛成し、反対はドイツのみであった。この結果、DR 1989 は、このあと ISO 理事会で承認されると正式に ISO 推薦規格となる。

(注) 現在米国 (ANSI) でおこなわれている ANS COBOL の改定内容を説明するために、1972年2月24～28日ワシントンで ISO/TC 97/SC 5 の Preparatory Group Meeting が開催され、小島和人氏 (富士通) が出席した。

### (c) その他の推薦規格

ISO の ALGOL と FORTRAN は、現在 ISO 理事会の承認待ちとなっており、近く ISO 推薦規格となる予定である。

## (3) 国内活動および今後の問題

昭和46年9月より原則として2カ月ごとに委員会を開催し、PL/I BASIS/1 を中心に検討しており、今後もこれを続ける予定である。(47年始めに BASIS/1 のコメントを ISO へ送付した。) BASIS/1 の完成 (47年12月完成の予定は若干遅れる見込み) までに、国内の他の PL/I 研究グループの協力を得て、できるだけ多く日本の意見を反映させ、国際会議での日本の発言力を強くしたい。また、PL/I subset も ECMA/ANSI で共同で作成されており、この検討も今後の本委員会の作業となる

ISO/TC 97/SC 5 の会議は1972年秋に予定されており、PL/I の標準化について討論される見込である。これらのためにも、PL/I の国際標準化に対する窓口を、本 SC 5 専門委員会として今後の活動を進めて行きたい。

### 5.5.1 SC 5/WG 1: Programming Languages for NC Machines 主査 研野和人

1971年10月の会議で APT システムのメインプロセッサとポストプロセッサのインタフェースである "CLDATA" のメジャーワードの原案が ISO/DR として認証された。"CLDATA" のマイナーワード、ポストプロセッサ用語および APT 言語のモジュール性についての討議にはいった。

わが国の NC 用プログラミング言語の標準化調査研究が、APT 言語を中心に次年度1972年から2年間にわたり開始される気運にある。工業技術院から日本電子工業振興協会に委託される予定である。

### 5.5.2 SC 5/COBOL WG 主査 西村勉彦

#### (1) 概要

SC 5 専門委員会と緊密な連絡のもとに活動し、その内容は、SC 5 の報告に述べられた通りであるが、ISO/TC 97/SC 5 主催の Preparatory Group Meeting (1972年2月24～28日、ワシントン) の結果により、ANSI の Proposed Change に対する検討を開始する必要がある。この国際的な動きに対する日本の意見の統合作成が今後の本 WG の仕事となる予定である。

### 5.6 SC 6: Digital Data Transmission 主査

#### 米沢威行

#### (1) 概要

当委員会は、1971年中に4回の委員会と15回にわたる作業部会を開催し、国際会議で決議された項目について審議を行なった。第9回 SC 6 国際会議は、ハーグにおいて1971年5月24日から28日まで開催された。わが国からは、水内清 (電電公社)、横山由彦 (沖電気)、林英治 (日本電気)、長沢晴美 (日立)、斎藤輝 (日本IBM)、山口宏二 (富士通) の6氏が出席した。

ハーグ会議以後は、ハーグ会議での決議事項について二つの作業部会を設け、引続き審議中である。

#### (2) ハーグ会議以前の主要議事内容

第8回バリ会議の決議事項に関する検討を行ない、日本の意見として次の6つの文書にまとめ、第9回ハーグ会議の資料として ISO 事務局に送付した。

(i) DR 2111 (コードインデペンデント伝送) の表現上の変更に関する日本の提案。

(ii) 決議20(中断手順と共に使用されるGo-aheadシーケンスについて)に対する日本の意見.

(iii) DRAFT PROPOSAL 401 会話形手順のISO勧告草案に対する日本の意見.

(iv) ドキュメント N 322, N 205 および N 207 TCC のプレフィックスと DLE シーケンスの使用に対する日本の意見.

(v) ドキュメント N 329, N 361 および N 345 ベーシック・モード手順に準拠した交互監視による情報の両方向同時伝送手順に関する日本の寄書.

(vi) システム・パフォーマンスに関する日本の意見.

(3) ハーグ会議の議事内容.

(a) ハーグ会議の主要決議事項.

(i) SC 6 の標題および範囲を改定する。(「データ伝送」を「データ通信」に改定.)

(ii) 新データ網に対するユーザの要求事項, 新データ網のVシリーズ・コンパティブル・インターフェイス, 並列データ伝送, 信号品質, 自動応答方式, ループ・テスト機能, マルチ・ドロップにおけるV. 26 モデムの接続回路, V. 23 モデムによる同期オペレーションについて CCITT へ文書を送付する.

(iii) ベーシック・モード制御手順とその拡張に関する作業は, 審議中の3項目(Go-ahead 機能, 両方向同時伝送, 番号制)で完結する.

(iv) 次の項目について検討を行ない, 次回会議までに文書の提出を求める.

- 1) 新データ網.
- 2) 信号品質.
- 3) IC インターフェイスの電気的特性.
- 4) ループ・テスト機能.
- 5) マルチ・ドロップ構成におけるV. 26 モデムのオプション回路.
- 6) V. 23 モデムによる同期オペレーション.
- 7) システム・パフォーマンス.
- 8) ハイレベル・データリンク制御手順.
- 9) Go-ahead シーケンス.

(v) 次回会議は, 1972年6月に開催する.

(b) 日本の主張に関する結果.

DR 2111 (コード・インディペンデント伝送), プレフィックスと DLE シーケンス, 両方向同時伝送手順に関しては日本の意見が受入れられた. しかしながらベーシック・モードの補足および会話形手順に関しては各国とも手を加えることを避けており, これらにつ

いての日本の意見は採用されるまでにいたらず今後さらに検討する項目として保留された.

(4) ハーグ会議以降の主要議事内容.

ハーグ会議において検討を要請された項目について詳細検討を行なうために, 二つの作業部会を設け, 次の項目について審議中である.

作業部会 1 (3) (iv) 項の 1)~6).

作業部会 2 (3) (iv) 項の 7)~9).

なお, ハーグ会議以降, 次の郵便投票を行なった.

(a) 新データ網における速度規定 (N 521 の表 1) に 1200 bit/s の start/stop および synchronous を追加するように提案した.

(b) DR 2111 (コード・インディペンデント伝送) の改訂 (N 516) に賛成投票を行なった.

(c) プレフィックスと DLE シーケンスの使い方 (N 516) に賛成投票を行なった.

(d) DLE シーケンスの拡張 (N 520) に対して, ファイナル・キャラクタのうちカラム7はすでにわが国において使用しているため, インタナショナル・ユースとすることに反対投票を行なった.

## 5.7 SC 7: Problem Definition and Analysis

主査 横井満

フローチャートおよびその用法に関しては, 国際標準も固まったので, 余り活発な動きは見られなかった. ただ, 第3回のベルリン会議で, フローチャートを, データ, プログラム用に分けて, それぞれに適した標準を別に作るとうとする動きがあり, 国内委員会でそれについての意見の交換を行なった. 10月1日, 11月2日の2回の会合をもち, 主として英国提案を中心に検討した. わが国では, 現在のフローチャートおよびその用法 (JIS 規格) で余り不都合も感じないので, 新しい標準規格には消極的な態度をとることとし, 各国より現標準の利用上の不備をまず明らかにすべきであるという意見を提出することとした.

国内委員会の結論を, コメントの形にまとめ国際会議の事務局へ10月5日に送付した (97/7N85).

## 5.8 SC 8: NC Machines

輪郭制御用可変ブロック紙テープフォーマット, NC 機械の操作用ボタンのシンボル表示, GとMの機能の見通しが完了し, ISO/DR へする手続きに入っている.

SC 8/WG 1 の NC 用語の最終原案が討議され, 1972年中には ISO/DR の作成に入っている.

“NC 用符号” および “位置ぎめ/直線切削用可変ブロック紙テープフォーマット” の JIS が審議されてお

り、1972年中に確定する。

日本工業規格 (JIS) 原案の作成。

工業技術院から、つぎの JIS 原案が日本機械学会に依託され、1972年3月末に完了した。

(1) 「NC用語」JISの原案作成委員会(委員長研野和人、以下20名)。

### 5.9 WG-K Representations of Data Elements

主査 安藤馨

#### (1) 概要

1971年中に7回の委員会を開催し、「単位の略号」および「年間通算日」に関する ISO Draft Proposal を審議し、これらに賛成投票をした。また、3月に開催された ISO/TC 97/WG K の会議に2名の代表を派遣し、この会議で要請された「産業」、「商品」、「職業」、「性別」、「血液型」のコード標準化の必要性を検討するため4つの研究班を作り、審議結果を ISO へ提出した。

#### (2) 国際会議

3月1日～5日パリで開催された ISO/TC 97/WG K の第2回会議に、日本から安藤馨(富士通)と海宝顕(日本 IBM)の両氏が出席した。

会議のおもな結果は、つぎのとおりである。

(a) 「年間通算日」の ISO Draft Proposal を作成し、承認が得られたら ISO 勧告案とするよう手続きをする。

(b) 「単位の略号」の 2nd Draft Proposal を作成し、ISO 勧告案にするため ISO/TC 97 の事務局に送付する。

(c) 「時刻の表示」については、24時間制による表示法の原案を米国が作成する。

(d) 日本提案の「産業」、「商品」、「職業」、「性別」、「血液型」のコードの標準化については、日本がこれらの標準化の必要性についてまとめる。

#### (3) 国内活動

当委員会の国内活動のおもなものは、つぎのとおりである。

(a) 産業、商品、職業、血液型および性別データコードの標準化の必要性について。

産業、商品、職業、血液型に関しては、「産業」(船崎武男主査—行政管理局)、「商品」(赤池仁主査—国税庁)、「職業」(上野滋主査—労働省)、「血液型」(上田陸奥夫主査—社会保険庁)の4研究班を設置し、性別に対しては本委員会で検討し、その結果を ISO へ提出した。

産業コードについては、国連の ISIC (International Standard Industrial Classification) を、商品コードについては、貿易用として国連の SITC (Standard International Trade Classification) を、職業コードについては ILO の ISCO (International Standard Classification of Occupation) を推すこととした。血液型と性別については、積極的な結論がえられなかったので消極的な提案に止めた。

(b) 単位の略号について。

2nd ISO Draft Proposal 「Representations for SI Units to be Used in Systems with Limited Character Sets」(ISO/97 N 422) に対し「賛成」投票をした。投票の結果、各国から多くの意見が出されたので、ISO/TC 97/WG K で再審議することになった。

(c) 年間通算日について。

ISO Draft Proposal 「Representations for Ordinal Date for Information Processing Interchange」(ISO/97/K N 67) に「賛成」投票をした。

投票結果、この Proposal が承認され Draft ISO International Standard として処理を進めることになった。

(d) 第3回 ISO/TC 97/WG K 会議。

第3回会議は、1972年4月10日～14日ベルリンで開催される予定。議題に「各国の活動報告」を追加すること、および「Numerical Expressions」は、議題より削除し事務局報告に含めることを ISO へ提案した。

(4) JIS 関係。

「性別コード」と「産業コード」の JIS が、それぞれ 1971年1月1日と4月1日に制定された。

## 6. 2 値論理素子記号、日本工業規格原案

上記原案はすでに昭和44年度に一応の案がまとまっていたが、IECの案が確定しないため最終案の決定に至らなかった。その後 IEC の国際規格もまとまってきたため、昭和46年においてこれらを参考にし、全般の調整をはかり最終案を作って委員会の活動は終了した。(委員長 穂坂衛以下14名。)

## 7. 漢字コード委員会(主査 林大他7名)

70年度にひきつづき、標準コード用の漢字の選定とその配列について検討した。配列については、年度内に成案を得る見通しが立たず、ひとまず、選定した漢字を「標準コード用漢字表(案)」としてまとめ、第2次の委員会にひきつづぐことにした。



この漢字表は、漢字 6,100 字を収め、かりに大漢和辞典の本文に従って配列してある。

## 8. そ の 他

### (1) 標準化講演会

46年3月17～26日（ただし、20（土）、21（日）の両日を除く）に、都市センターと都道府県会館で、「電子計算機の国際標準化——ISO の動きとわが国の歩み」と題して講演会を行なった。聴講者160名。

なお、この時発行した同題名のテキストは、10月12日の工業標準化実施50周年記念・第14回標準化全国大会において1971年度（第14回）日本規格協会・標準化文献賞をうけた。

## 9. 結 語

本年は、SC 4/WG 6, SC 4/WG 4, SC 2 の会議

を東京に招待した。すでに、1965年と1969年の2回、わが国に招待したことはあるが、本年のものはヨーロッパ諸国が幹事国である点がさきの2回の場合と違う。ヨーロッパ諸国とわが国とが国際標準化の面でも次第に接触を深めつつある例証と解され、同慶にたえない。

前年度は TC 97 活動費について悩まれたが、幸い関係の方々のご協力をうることができ、本年は一応解決できた。

明年度は TC 97 の改組の議題を中心に、わが国の意見を国際的な場に滲透させることに努め、かつ自由化の問題などに地味ではあるが一翼を担って進みたいと考えている。会員各位のご協力を切望する。

（昭和 47 年 4 月 3 日受付）